

「産廃会社はこの土地から出て行け！」 糾弾を賞賛に変えた「森の大掃除」

私たち石坂産業は、ホタルを育てています。

産業廃棄物処理会社がホタルを育て、地域の環境教育に役立てている。そう説明すれば大抵、褒められます。

けれど、私にはほろ苦い気持ちもあります。ホタルの育成に乗り出した頃の自分は、経営者としてまだ未熟だったかもしれません。

産廃処理プラントのすぐ脇に、熊谷組が開発した「ホタルビオトープ」のユニットを入れたのは社長就任間もない12年ほど前です。狙いは、ズバリこれ。

無実を証明したい。

当時、私たちは「環境汚染の発生源」だと、地域で悪者扱いされていました。その批判を封じたかった。ホタルビオトープのユニットを入れても、自然環境が悪ければホタルは育ちません。きちんと育てて「ほら、見てください。環境汚染なんてないじゃないですか」と主張したかった。

果たしてホタルは、すぐ育ちました。

けれど、地域の人たちの反応は鈍かった。

「ホタルが育った」という事実を振りかざすだけでは、閉ざされた人の心は開けませんでした。私たちのホタルが地

域で愛されるまでには、さらに長く、地道な取り組みが必要でした。

＜闘争小屋＞の監視で
売り上げの7割失う

かつて、石坂産業と地域との関係は最悪でした。

象徴的なのが、2001年夏、本社の目と鼻の先にできた「闘争小屋」です。動画カメラが設置され、私たちが産業廃棄物処理法などに触れることをしでかさないかと、見張っていました。スキあらば批判の声を高め、この地域から追い出そう。そんな目的で、地域住民や環境保護団体の方たち



いしざか・のりこ
1972年東京都生まれ。高校卒業後、米国の大学に短期留学。92年、父親が創業した石坂産業に入社。2002年社長就任。13年、経済産業省の「おもてなし経営企業選」に選ばれる。2児の母。写真は社内勉強会での1枚。社員発表に拍手を送る

石坂産業の概要

本社：埼玉県入間郡三芳町
創業：1967年
売上高：45億3000万円
従業員数：約130人
事業内容：産業廃棄物処理業

が建てたのです。

さらに埼玉県に対し、石坂産業の産廃処理の許可取り消しを求める行政訴訟が提起されました。住民の激しい批判の矛先は、県にも向かっていったのです。

その翌年の02年春、当時社長だった父と、営業本部長の私に転機が訪れました。

2人で社長室で話していたとき、私が苦しまぎれに言ったのです。

「いつそ、焼却なんてやめちゃったら？」

石坂産業に対する批判が高まったのは、産廃の焼却炉がダイオキシンの発生源になり得たからです。

父は黙りこくりました。何しろ、売り上げの約7割を焼却事業に頼っていましたから、けれど、短い間を置いた後、父は小さな声で、しかしはつきりつぶやいたのです。

「地域に必要とされない仕事をしても仕方ないからね」

返事はイエス。驚きました。決断の理由は「地域に必要とされたい」。若い頃、職も住

まいも転々とした父は、自らの意思で本社を置いたこの地に、強い愛着がありました。

ならば、父の思いを受け、私が「地域に必要とされる会社」をつくらう。何があっても絶対に、この会社を「地域に愛

される会社」に変えよう。それが崖っぷちまで追い詰められた石坂産業が生き残る唯一

無二の道だ。そう思い至って社長に志願し、02年4月に就任しました。

父と2人で、地域住民側の弁護士事務所を尋ね、廃炉の決断を伝えました。

しかし、それだけでは会社は潰れてしまいます。私たちにはプランがありました。

私たちが廃炉を決断すれば、行政訴訟の被告である埼玉県は歓迎するはずだ。

そこで県に提案しました。焼却をやめる代わりに、別の事業を拡大したい。これまでは細々と手掛けていた、建設現場で発生する解体資材の減量化に力を入れたい。ついでに、減量化プラントの増強に必要な許可を、速やかに出し

てもらえないだろうか、と。

県は、理解を示しました。計画申請からわずか3カ月という異例のスピードで許可が下り、辛うじて会社が生き延びる道が開けたのです。

熱い思いを貫いて 行政の力を突破

私にはさらなる「野望」がありました。当時のプラントは、露天に設備や重機を設置したものでした。これらを屋根と

壁で覆って、屋内に納めたかった。そうすれば、塵埃や騒音が外に漏れないので、地域の迷惑にならない。

「それは難しい」と、父は顔をしかめました。

なぜなら、私が夢想した「屋内型プラント」の実現には、行政の許可がいくつか必要でした。最大の難関は、産廃処理施設の新築や増築の際に求められる建築基準法の許可です。年に数回開かれる埼玉県の都市計画審議会に議題として上げてもらい、許可を得なければなりません。

最初は父が交渉してしまし

たが、一向にちがが明きません。行き詰まった状況が2年近く続き、私はしびれを切らしました。「その許可、私が取ってくるよ!」と、役所に単身、乗り込みました。

「生き残りを懸けて!」。そんな表題をつけた手紙を、事業計画書に添えて提出しました。私たちが置かれた苦境と、それでも「地域と共生したい」という熱い思いを、自分の言葉で訴えました。

けれど、反応は冷やか。世間でバッシングを浴びているイメージの悪さのせい、若い女性社長の私が頼りなく見えたのか。悔しかった。

そんな私に、こっそり耳打ちする若い職員がいました。「社長のおっしゃること、私には分かりますよ。何かいい方法がないか、私なりに勉強してみますね」。

その後も役所に出向きましたが、正攻法では難しそうでした。では、若い職員の「私なりの勉強」から、妙案が出てこないか。彼に何度も問い合わせました。



敷地内でホタルを育てている

そして彼は見つけくれた。プラントの新築には、都市計画法が定める、土地の区画形質変更の許可も必要でした。ただ、建築基準法ほどハードルが高くないので、私たちは後回しにしていた。しかし彼は、都市計画法の許可を先行して取ることを勧めた。そのほうが、建築基準法の許可が下りやすいはずだ、と。

実際、彼の言う通りでした。06年秋、念願の建築基準法の許可を取得。社長就任から約4年、「この土地で生き残る道がやっと見えた」と息をついたのです。

振り返れば、土壇場での逆転劇の連続でした。

私たちの主張は、「いい会社にするから、この地域に残らせてくれ」。それに対し、「いい会社か悪い会社かなんでどうでもいい。とにかく産廃会社には消えてほしい」と主張する人たちがいて、議論が平行線をたどっていました。

それでも粘り強く「必ずいい会社になりますから」と、四方八方に働きかけるうち、役

所の若い職員のような理解者たちが何人か現れ、突破口が開けていった。

行政の許可を得たことで、大きなマイナスだった状況をプラスマイナスゼロにできた気がしました。けれど、ここで満足してはならない。協力してくれた人たちに報いるためにも、「いい会社」と認められる、大きなプラスを勝ち取らなくては。そのために、何ができるだろう。

大きなヒントが足元に隠れていたのです。

道路掃除で気づいた負の連鎖とは？

社長就任後、社員に呼びかけ、地域のゴミ拾いをするボランティア活動を始めていました。理由は単純。私たちの会社の周辺の道路は、明らかに汚れていた。「環境汚染の発生源」という批判をかわしたいなら、会社の周辺くらい、こざっぱりしなくてはいけないと考えたのです。

日曜日、社員と一緒にゴミ拾いに汗を流し、「これできれ

いになった」と、意気揚々と引き揚げる。

ところが、月曜日の朝、出勤するとガツカリです。もうすでに、新しいゴミが道路に散乱しているのです。

ここで私が痛感したのが、負の連鎖です。もともと汚れている場所には、汚いものが集まりやすい。私たちが本社を置く、埼玉県の「くぬぎ山地区」と呼ばれる地域は、いつもどこことなく汚れていた。なぜだろう。

改めて観察して、気づきました。雑木林です。

くぬぎ山地区の道路沿いには、雑木林が多い。その中は薄暗く、うっそうとしていて、何やら怪しい雰囲気を感じていた。そういう場所には、みんなが持て余したゴミを気軽に捨ててしまう。

つまり、この「うっそうとした雑木林」をどうにかしない限り、問題は解決しない。それにしても、この雑木林は、いつからここにあるのだろう。昔から、こんなに荒廃していたのか。私の中に、地

域の歴史に対する興味が生まれました。

そこで勉強して分かったのは、この土地の雑木林は、自然林ではないこと。巧みな戦略に基づいて作られた人工林であり、いわゆる里山であるということでした。

この土地に多くの農民が集まってきたのは、江戸時代。川越藩主の柳沢吉保が開墾を指



産廃を運ぶトラックが敷地を出るとき、タイヤを自動洗浄する。近隣に塵埃が飛ぶのを防ぐ環境対策だ

揮した。ところが土地が乾燥して、水の確保が難しい。そこで吉保は、木を植えさせた。樹木が土地に根を張ると、地下水脈が引き上げられる。その結果、土を深く掘らずとも、井戸が通り、水が得られるようになった。

植えた木はすべて落葉樹。たい肥にするためです。落ち葉から作られたたい肥が、農作物と森林を育て、その森林が再び落ち葉を生む。そんな循環型農業が成立していた。

先人の知恵は、それにとどまりません。たい肥の材料を集めるため、秋に落ち葉掃きをする、地表が露出する。そこに、枯葉を落とした木々の間から日光が降り注ぐと、地表がジメジメしません。この環境が保たれると、春にはスミレの花が咲き、日本人の原風景である里山を彩ります。

ところが、私の目の前にあった雑木林は里山とかけ離れていた。循環型農業の衰退で里山が破壊され、不法投棄の温床になったからです。

つまり、この地域を美しく

するには、ゴミ拾いでは足りない。里山の再生まで踏み込まなくてはならない。

私たちは早速、行動を開始しました。雑木林に分け入り、落ち葉を掃き、下草を刈る。里山に不要な草木は、自分たちの手で根っこからほじくり返して取り除く……。

グローバルな着眼で 地域密着が輝く

活動を拡大するため、近隣の地主さんを回り、「森林を借り受けたい」と申し出ました。

高齢の地主さんたちは、自力では森林の手入れができず、荒廃に心を痛めていました。息子や娘を頼るうにも、大半は都心に移住しています。

私たちが「賃料を払って手入れをします」と提案すると、歓迎されました。管理する敷地は、やがて東京ドーム3・5個分まで広がりました。

そして、石坂産業の地元での評判は俄然、良くなった。

さらに、私たちの里山保全活動を広く世に知らしめたのが、生物多様性を保全、回復

する取り組みを評価する「JHEP (Japan Habitat Evaluation and Certification Program)」の認証取得です。

12年7月、最高ランクの「AAA」の認証を取得。当時、「AAA」を取得したプロジェクトは、私たちのほかには、森ビルが手掛けた「アークヒルズ仙石山森タワー」しかありませんでした。

無名の中小企業が、森ビルと並んだとあつて話題になりました。ホタルビオトープの評判も高まりました。

そもそも生物多様性という言葉が私のアンテナに引っかったのは、10年。「生物多様性に関する名古屋議定書が締結された」というニュースを聞いたときです。ピンときま

した。これは、私たちの里山保全活動と何か関係がありそうだと。そこで「生物多様性」をキーワードに猛勉強。そこで「JHEP」を知った。

やつぱり勉強は大事です。大人になつても、経営者になつても、日々勉強です。

ちよつとした思いつきだけでは、大きな共感は得られません。「地域の人に愛されたい」という私たちの望みは、ホタルを育てるだけでは叶いませんでした。けれど、そんな小さな一歩を起点に地域の歴史を学び、世界の人たちの問題意識と照らし合わせたとき、大きな変化が生まれました。「Think global, act local (グローバルに考え、ローカルに行動する)」——そんな言葉に私は共感します。

教訓

経営者の熱い思いで、行政も動く。
歴史を学び、世界を見渡せば
地方創生の道が見えてくる。



子供たちを交えて敷地内の落ち葉掃き。かつて不法投棄の温床だった森林に、美しい里山の風景を取り戻した

※この記事は日経トプリーダーのウェブサイト (<http://business.nikkeibp.co.jp/special/topleader/>) の連載を再編集しました。石坂典子社長の連載は今回で終了です。次回からは銀座テラーの鰐淵美恵子社長が登場します。